

幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか

運動を主とする遊びの問題の面



(一) 子どもというもの

一回、二回大きく振って前方にとびだすぶんこ遊び、得意満面もろ手をあげてのジム上でのバランス、高い台からとび下りて喜々としている腕白坊や。いたるところ冒険とスリルに富んだ遊びの場面が展開される。いわずもがな、幼稚園児の自由遊びのひとつま。

かかる活動的・活発な運動的遊びこそは、急速に伸びつつある彼ら本来の姿であり、彼らの真の生活なのである。しかるに、このような遊びに対し、多くの教師は、これを不当に干渉したり、あるいは抑圧・禁止するという現状にある。

もちろん、数多くの遊びの中には、抑圧・禁止せねばならないような場面もあるにはあるが、かかる小言をいいたがる教師の多くは彼らの運動的遊びに対する能力について十分知らないのではないで

岡 本 卓 夫

あろうか。このような運動的能力やかかる遊びに関連のある他の事から（知的、社会的、情緒的発達）について知っておりさえすれば、不当な干渉や抑圧・禁止もしないだろうし、場合によっては、むしろ、そのような自然発生的遊びの場面よりもっと教育的な遊びの場面を展開させてやることができるのではないであろうか。

教師たるもの、伸びんとする彼らの芽を摘む前に、このような彼らの運動的遊びについての実態をよくきぐっておく必要があるように思われる。

(二) 運動的遊びの複雑さ

では、運動的遊びの面で、幼稚園の時期にどれくらいのことでき、どれくらいのことか期待されるであろうか。

この問題を解決していくに先だって、運動的遊びの複雑さ、ということをも十分知っておかねばならないだろう。それによって、期待のし方や期待の度合も異なってくるからである。

先ず第一に、運動的遊びといっても、それにはいろいろの種類があるわけだ。幼稚園教育要領流に分けると、(1)器械遊び (2)リズム遊び (3)その他の遊びというように分けられるであろう。さらにそれらは、それぞれ具体的な種目に分けられるであろうし、それらの中には、むずかしい遊びや比較的やさしい遊びなどいろいろある。このように、遊びの種類やその難易度によって、期待の度合も異なってくるということを知っておかねばならない。

第二に、遊びをする人数、すなわち、ひとり遊びの時とグループ遊びの時とでも、その期待の度合は異なる。さらに、グループ遊びでも、人数の多少、同質あるいは異質という具合に、そのグループの構成のし方によっても異なってくるということも知っておかねばならない。

第三に、彼らの生活背景、すなわち、家庭に遊具をたくさんもっているとか、近所に公園など遊び場があるとか、あるいは大ぜいの兄弟姉妹の中で育ったとかなど、彼らをとりまく生活背景やその中

での経験の程度によっても期待の度合は異なるということを知らねばならない。

第四に、幼稚園に遊具が十分備わっているかないか、あるいは子どもたちが十分活動できるだけの遊び場所があるかないかによっても異なる。

第五に、教師が子どもと一しょに遊ぶか遊ばないか、すなわち、彼らの遊びを指導するかしないか、それも、じょうずにするかへたにするかというような、教師自身の認識や理解、あるいは指導技術といったものによっても、その期待の度合は異なるということを知っておかねばならない。

その他、いろいろのことが考えられると思うが、運動的遊びといっても、このように、種々の条件が伴ってきて、それらの条件の作用のし方によって期待の度合も異なってくるということを十分考へて入れておかねばならないと思う。

だから、運動的遊び全般を考慮に入れてこの問題をひとくちにのべるということは、たいへんむずかしいことである。したがって、あるひとつのまとまった遊びをとらえ、それを中心にして説明していった方が簡単であるし、むしろ、その方が理解もし易いのではないかと思う。

そこで、今回は、ぶらんこやすべり台など、主として固定運動遊具による遊び(器械遊び)を中心にし、それらの遊びに関係あるもので、どんなことが幼稚園の時期に期待されるかというように

ていつてみよう。とはいえ、先にものべたように、種々の条件が伴うので、そこには、なお、大まかな表現のしかたもあるということを中心にどめておいていただかねばならない。

(三) 運動を主とする遊びの問題の面でとれだけのことが期待されるか

そこで、固定運動遊具遊びの場で起る諸要因を、一応、次のように大まかな五つに分けて考えていってみよう。すなわち、

- (1) 運動能力
- (2) グループの人数・構成
- (3) 人間関係
- (4) きまり
- (5) 遊び時間の長さ

先ず、

(1) 運動能力について

運動的遊びの場であるから、そこには、当然彼らの運動能力の問題が考えられるであろう。では、固定運動遊具遊びにおいて、どの程度ができるか、どれくらいのが期待されるであろうか。

先ず、筋肉の面であるが、腕の筋力の代表的なものとして懸垂持久力が挙げられるであろう。鉄棒での懸垂持久力テストは、平均一分〜一分三〇秒くらいである。中には三分くらいできる子どももいる。

しかし、足をかけてゆするとか、あるいは雲梯で渡って遊ぶとかいうように、動かしたり、移動したりするような遊びになると、せいぜい一〇秒〜二〇秒くらいしか続かない。また、腹筋力の方では、鉄棒あるいは大鼓橋にぶら下がっていて、両足を腕の間からぬいて回れるようになる子どもが、大体三〇〜五〇パーセントくらいになる。

敏捷性（スピードを含む）の面では、滑面四メートル・傾斜三〇度のすべり台を長座すべりですべり下りるのに三・五秒〜四・〇秒くらいになるし、一・八メートル四角のジャングル・ジムを一周するのに二・五秒〜三・〇秒くらいに、また、そのひとつの穴をぐりぬけるに九秒〜一四秒くらいに、二・五メートルの高さをよじ登っていくのに八・五秒〜一二秒くらいになる。しかして、この上で「鬼ごっこ」もできるほどに、すばやく動けるようになる。また、長さ六・四メートルの固定円木上を三〜五秒で渡れるようになるし、二メートルのはん登棒も、約五〇パーセントくらいの子どもが七〜八秒で登れるようになる。

平衡性の面では、ジャングル・ジムや太鼓橋の上で両手をはなして立てれるようになる。また、固定円木の上で、前向きや横向き姿勢で自由に渡り歩くことができるし、この上で「ジャンケン遊び」もできる。少々さわられてもうまくバランスをとって我慢することも、ができる。男児より女児の方がうまい。ぶらんこ遊びにおいても、九〇パーセントくらいの子どもが、ゆすりながら自由に立ったりしゃがんだりできるようになる。その他、鉄棒に腰かけて両手をはな

せる子どもとか、遊動木をゆすりながらその上を渡っていく子どもとか、あるいは、すべり台を立ったまますべり下りるといような子どももでてくる。

器用さの面では、この時期までに随分いろいろの芸当ができるようになる。ほとんどの子どもが、すべり台でどんな格好をしてでもすべれるようになる。ぶらんこでも、九〇パーセントくらいの子どもが自由自在にゆすれるようになっていし、八〇パーセントくらいの子どもが、ゆすつていて前方にとび出すことができるようになっていっている。さらに、その「ふれの角度」をみても、前後で一〇〇度くらいゆすれるようになっていっている。鉄棒でも、幼児的種目ではあるが一五種目くらいできるようになっている。例えば、足ぬき前・後回り(約五〇パーセント)とか、腹かけ懸垂(約七五パーセント)あるいは、ごくわずかではあるが、さか上がりとか足かけ回転などでもできる子どもが出てくる。また、ジャングル・ジムや太鼓橋、あるいははん登棒でのくぐったり、渡ったり、あるいは登ったりなどする競争ができるほどに、手足の協応動作も発達してくる。

以上、運動能力の記述としては、やや大きっぱなものはあるが、おおよその見当はついたことであろう。なお、かかる能力も、スピードと力を必要とするような遊びでは男児の方が、平衡性や器用さを必要とするような遊びでは女児の方がそれぞれすぐれているということ、また、教師がそばで声援すると、その結果が多少良くなるということをもつけ加えておいてよからう。

(2) グループの人数・構成について

次に、運動的遊びにおいて、どれくらいの人数で遊ぶことができるかというに、放任しておけば、先ずこの期の子どもでは普通五、六人までのグループでしか遊べないであろう。それも、比較的気持の合った子ども同志の時に限られるであろう。しかし同質グループあるいは異質グループというように、グループの構成メンバーによって、その人数が多少変動することはいない。

だが、かかる彼らのグループも、教師が入って一しよに遊ぶということになる、八人くらいの人組のグループで遊べるようになり、かかる指導を続けていると、一四、五人のグループでも遊べるようになる。

(3) 人間関係について

では、次にこれらグループ成員間の人間関係はどうであろうか。

一般に、リーダーになる子どもは、活動的・活発でホスの存在の子どもの場合に多いが、彼らの自由遊びでは、それはまだ話し合いで決定するまではできないで、そこから辺に集まったグループの中のかような子どもがそのグループをリードするといった按配である。そして、他の子どもたちは、それに対して何もいわないでフォロア一となり遊びにはいっていくものである。しかし、一たん遊びがじまると、ほとんど相互交渉らしきものはみられないで、多くの場合、連合遊びになってしまうものである。

ところが、このようなグループでも、教師がはいって助言したり

暗示を与えたりすると仲よく遊べるし、五、六人のグループなら、こうした助言や暗示によって話し合ったり、譲り合ったりして遊びが進められるようになる。しかし、このような指導を続けておれば、彼らだけの自由遊びでも、こうした場面が、みられるようになる。しかし、人数が多くなって一〇人以上にもなると、教師がいてもこのような話し合いの場はほとんどつくれない。こんな時は、対教師との関係において遊びが進められていくだけである。

このように、幼稚園期の運動的遊びの場における人間関係は、対教師という、いわゆる縦の関係だけでなく、対仲間という横の関係もみられるようになり、指導のし方によっては数人のグループで自主的に遊べるようになるものである。

(4) きまりについて

それでは、きまりの面では、どうであろうか。後らの自由遊びでは、今のべたようなリーダーが先に立って遊びをはじめ、そのリーダーの行動様式がその遊びのきまりになっていく場合が多い。例えば、ぶらんこ遊びなどでは、リーダーが何回かゆすって下りると、次に元気な子どもが乗る、という具合に順番に乗っていき、これが「乗る順番」の「きまり」になっていく場合がある。まれに民主的リーダーがいて「一〇回ずつ交代よ」というように決めることもあるが、多くの場合、彼らだけの自由遊びでは、はじめからきまりといったようなものはつくって遊ばない。

しかし、これも教師が指導を加えると、一、二のきまりなら守れ

るようになるし、さらにうまく指導すると、五、六人のグループなら、彼らだけの話し合いにより一、二のきまりをつくって遊べるようになる。しかし、そのような指導を続けておれば、それくらいグループでなら、教師がいなくても、きまりをつくって遊べるようになるものである。

(5) 遊び時間の長さについて

では、このようにして遊びが展開された時、いったい、何分くらい遊べるものであろうか。積木遊びや砂遊びのような構成遊びの場合で二〇分も三〇分も遊ぶというのはめずらしくはない。しかし、運動的遊びではそうはいかない。ひとり遊びで、しかも彼らの好きぶらんこ遊びやすべり台遊びを自由にやらせた場合でも、五分〜九分くらいである。だから、彼らだけの自由なグループで遊ぶということになる、この期の子どもでは、これよりかはるかに少ない時間になってしまうのである。

しかし、これも教師が一しょになって遊ぶ場合には、ひとつの遊びを一〇分くらいは続けられるようになる。

以上、きわめて大ざっぱではあるが、幼稚園期の子どもの運動的遊びの場で期待できそうな問題についてのべてきた。しかし、これらに関する研究資料も少ないので、ここへのべたものが正しいかどうかはわからない。ただ、目安的な役割としてなら参考になるかも知れない。さらにはつきりしたことは、今後の研究課題であろう。

(徳島大学)